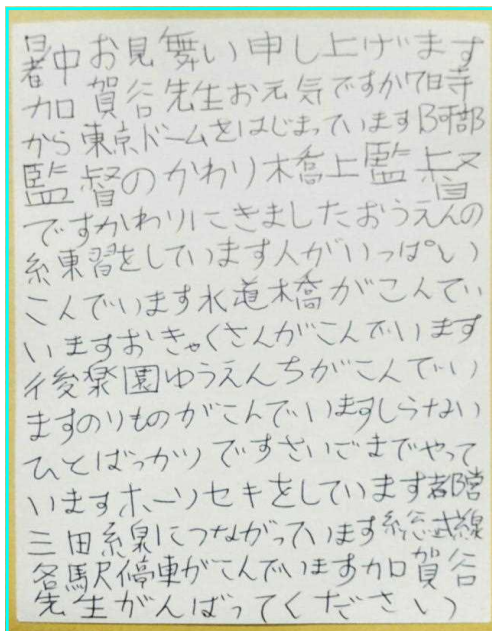


「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「私の苦い思い出」

かつての生徒であるSさんから、暑中見舞いと年賀状が届くようになり、かれこれ40年になります。内容はいつも同じで、読売ジャイアンツの監督の名前、水道橋と後樂園遊園地、都営三田線と総武線が混んでいること、最後に私を励ますメッセージです。毎年のルーティンになっています。そんなSさんにまつわる忘れられない「私の苦い思い出」を紹介します。



今年55歳になるSさん（知的障害を伴う自閉スペクトラム症）は、私が最初に勤務した千葉県松戸市立第一中学校（自閉症・情緒障害特別支援学級）に在籍していた素直な性格で、笑顔が絶えない生徒である。野球が大好きなSさんとは、毎日のように休み時間になると、外でキャッチボールをしていた。

40年前の千葉県では、中学校の特別支援学級を卒業すると、一般就労を希望する生徒は特別支援学校高等部に進学せず就職していた。Sさんは、指示の理解力があり、長時間の作業にも集中して取り組める体力もあったことから就職を目指した。初めて職場実習した先は、段ボールを製造する会社だった。Sさんなら高評価を得て、すぐ就職できると考えていたが、思ったように力を発揮できなかった。職場は常に大きな機械音がするため、会社の人の指示は、自然と大きな声になる。穏やかな性格のSさんにとって、大きな声の指

示は怒鳴り声に聞こえ、作業に集中できなかったのである。すっかり自信をなくしたSさんを見て、私は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そこで、穏やかで素直なSさんの強みを生かすためには、家庭的な雰囲気年配の女性が多く、決まった手順で繰り返し行われる定常作業ができる職場が最適と考え、つまみを加工する小規模な会社を探した。機械音はするものの「ガガガ」「キーン」という大きな音ではなく、周囲の人も優しい言葉を掛けてくれるので、笑顔で実習を終えて就職につながった。

Sさんの強みは、誰に対しても自分から笑顔で挨拶をしたり、素直な心で人と関わったりできることです。挨拶は自分を変えます。自分が変われば周りの人も変わります。素直な心があれば、周囲から好かれ、「あの人には教えてあげよう！」と思ってもらえます。みんなから「めんこがられる子ども」を育てましょう。



とれたて直送便



【子どもに「分かっているよ」と伝える3つのポイント】

- ①感情は受け止める～ 本人の気持ちを受け止める。言葉で伝えるのが苦手な子どもには、「～な気持ちだったんだよね」と代弁する。
- ②環境は調整する～ 子どもが過ごしやすい環境を調整する。聴覚過敏の子どもにはイヤーマフを付ける、不安になったときには落ち着ける場所を用意する。
- ③行動は指導する～ 行動は無理に止めてもうまくいかない。やってほしい行動を見えるように教えたり、代替行動を示したりする。そして、すぐ練習をする。

子どもが一番望んでいることは、「自分のことを分かってくれること」である。